場所　〒502-0812 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ

千秋（せんしゅう）まちかど文庫 通信

第185号
2023年12月

運営委員会発行（記録:安藤彰浩、編集:中川健史）（主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第185回哲学カフェ例会（2023.11.9）

《改めて私たちの家族観を問い直してみよう。》

「いまだに、家族のイメージは古いままでイメージされているように思われる。だが、世の中は激変しています。あらためて一人ひとりの内なる家族観が問われているようです。」

＜問題提起＞　主宰者：吉田千秋

・今回、家族観の問題を取り上げたきっかけは、「旧統一教会」という反社会団体と自民党との長年にわたる癒着が大きな問題になったからです。両者は反共主義と家族主義という二点で双方が長年持ちつ持たれつの深い関係を築いてきたのです。

・家族・家庭問題については、安倍政権が発足して、「教育基本法」を変えて「家庭教育条項」を設置し、「家庭教育支援条例法案」を各県に条例を波及するようにさせました。

・こういうこともあって、「家族が」大事、「家庭」が第一、ということが吹聴されました・

・だが、一体「家族」「家庭」って何でしょうか。この二つの政党：団体の「保守的・伝統的家族観」は、社会、国家の基礎は「家族」で、天皇、「真のお父様、お母様」を国家の中心に据えた「国家観」「社会観」なのです。

・この古めかしい「家族観」に代わって登場したのが、高度成長主義時代の「標準家族＝標準家族」という指標です。これは、「夫が働いて妻は専業主婦、子どもが二人」で、これが様々な社会的指標の標識とされ、基準とされました。だが、その後共働き家族が増加し、「標準家族」は5%以下になりました。さらに、65歳以上のいる世帯が過半数になり、一人世帯も大変多くなりました。いまや「標準」という指標は陳腐になり、様々な家族のありかたが根本的に問い直されるようになりました。

・こういう経過もふまえて、いろいろ問題が浮かび上がります。まず、そもそも家族とは何なのか。多く記されているのは、「家族とは、夫婦の配偶関係や親

子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団。社会構成の基本単位」です。だが、「家族」は社会の基礎なのか、社会の基本は個々人ではないのか？　という問題です。これについては「家族」、「世帯」優先より、日本国憲法で明記されて「個人」が優先的に尊重されるべきではないのか、と思われますが、どうでしょうか。

・さらに、家族が血縁関係の構成であるというのは事実として当たり前ではない。養子縁組の家族、LBGTQの人たちの「家族」など、様々な「家族」がある。そもそも「家族」を前提とし、結婚・家族をあたり前とし、幸せでもあるとすることが古いのではないのか。

・今日はこのように多様化した「家族」の現状を前にして、私たちの「家族観」を問い直したいと思います。昔も今も、何せ家族の幸不幸、葛藤は千差万別で、『アンナカレーニナ』にあるように、「幸福は一様だが、不幸は様々」です。一人ひとりの幸福をもたらす家族・家庭であることを願っていますが、率直に意見交換したいと思います。

＜意見交流＞

〇家族に対する考え方は、天皇や皇室に代表されるように、宗教とも結びついて伝統がつくられてきた。そうした文化との関連で今後どうなるのか、相当根の深い問題だと思います。また、家族を経済的な生活共同体として捉える考え方もあり、例えば会社ファミリーなんていう表現もその一つ。それが宗教チックなこととも絡んだりして、運命共同体にもなっている。

〇家族は血縁に基づくという考え方は、もう意味がなくなってきた。近年の少子高齢化の中で、それは消滅していかざるを得ない。一方で人間は孤独では生きていけないし、孤独はたくさんの社会問題を生む。そこで求められるのは新しい家族像だが、日本人に欠けがちなコミュニケーション能力の問題がネックになる。また、新しい家族観に変わらざるを得ない現状の中で、権力の側は社会の構成単位としての家族を、伝統的な家族の形に留めようとする動きもある。

〇私の場合、個人的な経験から、家族が共同体的な繋がりとか血縁とかというより、どれだけ大切に思えるかという部分が一番大事な気がする。家庭内の問題が法廷までいっちゃうと、さすが家族とは思えない。

〇複雑な家に生まれ、人間関係がゴチャゴチャしたこともあって、あえて言えば私は今一緒に住んでいる人が家族ということになる。家族には一緒に生活するが故の葛藤がある。他人になら控えるワガママを言ってしまって、余計面倒臭くなることも多い。でも、それが自分の寄辺にもなったりして、家族ってそんなものかなーとも感じる。

〇家族の中でも、親子は血縁関係だが、夫婦はそうではないから行政的な関係になる。

〇「兄弟は他人の始まり」というが、共同体の関係にならない場合もある。

〇親子は血縁関係だが、合う・合わないとかの問題もある。兄弟でも白っとした関係であったりする。自分の子どもに対しても、健康に生きていってくれれば、と思うだけ。

〇私は戦後の時代を生きてきたが「家族って何だ」ということをほとんど突き詰めて考えることはなかった。結婚してからも家族の生活を成り立たせることに追いかけられ、それをひたすら進めていく感じだった。ところが勝共連合が「家族」を守って、その上に国家をつくるという考え方があるということで、警戒しなければと思っている。

〇大学で平和学を教え、特に加害者としての戦争体験を伝えることを重視している。近年の戦争を見ても、戦争で真っ先に犠牲になるのは子どもだ。親の庇

護なしには生きられない存在であるのに、親や大人社会や国が子どもを保護しない世界になってしまっている。また、昨今の日本では親による子どもの虐待とか、保育園の保母さんによるそうした事例も含め、今の家庭も社会も子どもの”ゆりかご“ではなくなっている。鳥は、卵を産めば巣立ちまでは必死で面倒をみる本能を持っています。現代の日本の生き方というのは、本来の生物の在り方から逸脱していて、いろんな現代文明の病に繋がっているのではないか。

〇私はとても幸せなのかもしれませんが、娘が4人いて、みんな結婚して孫もいて、娘の旦那も孫も含めて16人が今の家族と思っています。家族への思いはそれぞれですね。また、子どもに対する捉え方ですが、一人一人を育てるというよりは、“自分に属するもの”みたいな感覚が多いなーと思います。さきほど、孤独という話がありましたが、同性婚などの方々が子どもを持ちたいとか言われる場合に、そういう感覚なのかなーと。また、私の時代は、人を育て成人にしていく役割もあったのではないかとか思ったりしました。

〇私の家庭はかなりこじらせた家庭だったので、自分の子どもや親もいるのですが別居し、パートナーと暮らしています。血がつながっているとかで、他人ならスルーできることでも、複雑になってしまうパターンが多かった。私は子どもを守ることを一番にして、家族の形にこだわらない方がいいと考えています。幼少期に安定して家族と暮らせればそれにこしたことはないが、相手を敬い思いやる環境が大前提だと思います。だから、子どもにも親にもパートナーにも、個人個人として付き合い、家族にはなりたいとは思いません。チョッと新種かも知れませんが、家族という言葉とは別の表現があるといいのですが・・・。

〇かつて国(お上)は、母子家庭の事を欠損家庭と呼んだりしましたが、人々や個人を大切にするは発想から出た言葉ではなかった。少し前某政務官が「LGBTは生産性がない」などといって問題になりましたが、「標準でない」とか「子どもがいない」・「結婚しない」などをマイナスの価値のように言えば、結局お上による介入・押し付けになる。誰もが幸福を求めて生きてはいるものの、幸福の中身はそれぞれ。あくまでも社会の基礎は一人一人の個人、そしてその尊重が大原則です。

〇やっぱり一定の共同生活の中では、お互いのケアが大切で、日本ではそういうことがもっと強化されないといけないと思っています。私の住む市では、年間の100人の孤独死があるとの話ですが、それが本人にとって幸か不幸かは別にして、悲しいことです。必要なものが手に入らなくなったら助けてもらう・助けてあげる、そういう関係が余りにも希薄になっている。人間が人間らしく、多様な生き方をしていく。でも、その横軸にケアがきちんと施される社会であってほしいです。

〇人間は親から生まれるのだから、親子を核とする家族は人類に根本的に不可欠なもの。今回問題になっている事例は、いろんなケースを認め合うことが必要だということであって、根本の部分は変わらない。標準家庭云々については、行政は統計的に国民を把握し施策を打つが、平均値として国民の基礎単位の実態を見定めたうえで、そこを軸に支援などをするということだ。したがって、そこから外れたら排除するような事例については、個人の尊重を原理とする憲法に沿った解決が必要だが、行政がマジョリティーに標準を合わせるのは合理的なことだ。

＜意見交流を終えて＞　吉田千秋

今日は家族の問題をめくっていろいろな意見ありがとうございました。問題は多岐多様で、一筋縄でいかないようです。でも、根本は、一人ひとりが尊重され、幸せに生きることが出来ることで、家族・家庭もそれを実現するためにどうしても必要なものです。だが、世帯を基本に置いた法制度上の決まりでは個々人の権利・尊重は守られません。改めて、伝統的な家族主義や、家族観を問い直す必要があるように思われました。

◎(補足:吉田)

今月号の「通信」に、戦争中の南京事件について寄せられた感想文がある。これは南京事件で何十万も殺されたと言われているが、日本兵がそんな意味のない虐殺をするとは思えないという意見だった。

これについて、当日参加された今井雅巳さん(岐阜大学非常勤講師・平和学)が、このような意見を持っている人たちはいまだ少なからずおられる。しかし、戦後の戦争犯罪裁判での証言や、その後の事実調査、研究結果から、日本軍が南京だけでなく、中国本土内でいかに残虐な行為を行ってきたことを知る必要があると指摘された。

そしてその資料として、「中国帰還者連絡会」(＝中帰連)関係のパンフ類を提供された。この組織は、ソ連によってシベリアへ抑留された者の中から、戦犯として中国に引き渡された969名が撫順戦犯管理所に収容され、数年後釈放され帰国した後に創設されたものである。この人たちの証言はいくつかの「戦中日記」とならぶ貴重なものである。

私も1980年台初期に、開設当初の「南京虐殺記念館」を訪れ、おぞましい虐殺現場の再現や、数々の証拠品・写真を見た。ウクライナ、ガザなどでいまも続く虐殺を一刻も早く止めさせるためにも、日本軍の行った戦争犯罪にしっかり向き合う必要を痛感しています。

＊「中帰連平和記念館」(049-236-4711)は、埼玉県川越市にあります。

＜例会及び「通信」の感想、意見、便りなど＞

○戦争を家族が支えるような社会にしてはならない

「家族」と言えば私が出生時に存在した家族構成体の中で生き、流れるようにその中で存在し続け時間の経緯と共に成長してきたその構成体のことであろう。

「家族とは」について家族や廻りの人々から断片的にあちこちで聞いた話しの集積が一般家族の私が理解する手立てとなった。長年の間、「家族」の定義や「あり方」について重要問題として私の前に現れることはなかった。そういう時代でもあっただろうし私の個性のせいもあるだろう。

ところが旧統一教会系の団体が「家族を核とする国家を構成する」との考えから地方議会に家族活動を促進する条例の制定を働きかけているというニュース報道を聞き驚いている。戦前社会のような戦争を家族が支えるような社会にしてはならないと警戒心を持った次第である。

（アダム・スミス）

○「ピラミッド型」の支配的構造から民主的な「水平円環型」構造に

今回の「家族について」考えるというテーマは、万人に共通する身近な興味深い問題である。それでいて、家族問題について何かをしゃべってみよ、と言われると、何を切り口にしてよいかわからないほど、複雑で多様な問題を含んでいる。

とは言え、「家族」と無縁な人はいないのであり、「家族の問題」は社会の問題であり、政治の問題であるととらえることもできる。というのは、血脈で結ばれた「家族」は、社会の基本単位と考えるなら、日本の伝統的な家父長的「ピラミッド型」の支配的構造自体が、根本的に問題だと考えられるからである。

この数十年間、日本の「家族構成」は大きく変化してきたということが報告されたが、その基本構造に揺らぎと崩壊の兆しを読み取ることができる。旧来の「ピラミッド型」構造が崩壊することは歓迎される。新しい家族・家庭モデルが進化してくれば、「家族構成」は、民主的な「水平円環型」構造に移行できるかもしれない。

しかしこのような構造変化を最も恐れているのは、

時の権力者であり、あらゆる組織の支配的立場にある階層であろう。論理が欠落した「家族愛」を声高に唱える、現政府・公権力や保守系団体の「日本会議」、「旧統一教会」（世界平和統一家庭連合）の関連宗教団体も例外ではない。　（MS）

○人間は孤独では生きられない

抑圧は症状としていずれ回帰するというフロイトの言説にあるように、親、兄弟からの種々の虐待、学校、会社内のいじめなどハラスメントを受けて成長したため、従来の血縁、場所縁に基ずいた共同体になじめない、あるいは離脱したいと考えてるヒトは一定数確実に存在します。

しかし人間という生物の特性上孤独では生きられないので離脱したあとに人々を包摂する居場所、共同体の必要性は今後ますます高まると考えられます。

問題はここ30年主流の、「いまだけ金だけ自分だけ」というネオリベ的な思考にからめとられて相互扶助、義理人情などを経験および学習することが出来なかった人々が人口のほとんどだと思いますので、その能力をどう獲得するのかが一番重要だと思います。しかし自分には具体的にどうすればいいのか全然わからないのが本音です。

（たなか）

○あくまでも個々の人権を尊重する観点が大事

家族は人間関係の基礎的な社会構成の最少単位である。そして、子供が十分に成長するためには必要

不可欠である。法律的にも、親は子を扶養する積極的な義務がある。しかし、子は年老いた親を面倒を看る法律的義務はあるものの消極的な義務に感じる。ただし、子が親を思う気持ちは好ましいという考えは、世界共通で疑うことはないだろう。

国は政策立案上、家族をモデルケースとして採用することが多い。間違いではないが、全てをこの単位で仕切ると、はみ出す層をカバーできない。また、あくまでも個々の人権を尊重すべき観点からは、問題となった給付金支給などは家族（世帯）へ行うものではなく、個々人への支給が筋である。

昨今の子育て政策の中で、子供は社会で育てるという考え方があるが、社会から取り溢れる子供がないようにするための、いわゆるフェールセーフであるべきで、絶対にその機能をあてにして子供を産むことがあってはならない。

（ryosa）

◎　＜べんぽすた＆ポポロ ニュース＞11月号より

「‥私が思ったのは、議論とは、相手の意見を聞いて、自分の中にどう落としていくか？だと思いました。哲学カフェなどでは、度々、意見の違いがある場面もあって、それがまた楽しく、遠慮なく安心して言える場ではないかと思います。‥」

（ZOOM参加者のめぐみさん）

＜この一本＞森　達也 監督 「福田村事件」
日本映画、2023年全国放映中

1923年9月1日に起きた関東大震災後、多くの朝鮮人・中国人が虐殺され、大杉栄など無政府主義者や社会主義者・労働運動の指導者も殺害されたことは知られているが、福田村事件はどうだろう。この映画の監督森達也は、2003年の著書でこの事件を紹介しているが、私は中川五郎の歌「1923年福田村の虐殺」で4年前初めて知った。

地震後の9月6日、千葉県東葛飾郡福田村（現:野田市）で、四国の香川県から来た薬の行商人一行15人中9人が地元の自警団に虐殺される事件が起きた。長い間闇に葬られていたが、1979年に事件の遺族からの依頼で千葉でも調査が始まり、事件から80年後その全貌がほぼ明らかになった。

この事件は、軍や警察も絡んだ朝鮮人に対するデマ情報が広がる中、香川の方言が千葉の人にはよくわからず、行商人一行が朝鮮人だとされて起きたと言われる。また被差別部落の問題や、行商人一般への差別意識も背景とされる。

映画は震災前の福田村の人々の様子や、香川を旅立った行商人一行の福田村までと村での足取りを丁寧に描く。そして後半一気に物語は進む‥‥。

福田村は特別な村ではなく、当時の日本ならどこにでもある村だ。もし濃尾地震が1923年に起き、「福田村」と同じような状況だったら、岐阜で何が起きたかあまり想像したくない。いや現代でもパニック状態になったとき、私たちの社会は何をしでかすのか、そんなことを考えさせる映画だ。

（井川敏郎）

＜この一冊＞　森　達也著　「虐殺のスイッチ」出版芸術社、2018年

いま新たな「虐殺（ジェノサイド）」がウクライナに続いて、パレスチナで起きている。一体なぜ「虐殺」は起きるのか、誰が起こすのか、特別な人間か、国家が絡んでいるようだが、どのような仕組みでそれは行われるのか、などなど。

この大きな問題に立ち向かった著者森達也は、本書を書いた3年後の今年、100年前に起きた関東大震災時の朝鮮人虐殺を描いた映画「福田村事件」を撮った。（→上記の＜この一本＞参照）

彼はアウシュビッツをはじめ、カンボジアのポル・ポト派による虐殺現場を訪ね、オウム真理教の死刑囚たちにも取材し、虐殺の歴史をふり返っていくつかの問題を提起している。

たとえば、関東大震災では罪もない人たちが多くの人を殺し、アウシュビッツでは「凡庸な人間」が命令をしている。これは明らかにある個人が主体的に決断しているのでなく、国家の命令に服従したり、「流言飛語」を信じた結果である。この背景にはユダヤ人差別、朝鮮人差別をけしかける国家の施策があった。

こういう考察から言えるのは、いまだに続いている虐殺の行為を止めるには、私たち一人ひとりが国家権力の目指す方向になびき、からめとられることのないように、お互いに力を合わせることしかないと思われます。

本書から現在の世界、明日の世界、日本の明日を考えるために、ぜひ手に取って頂きたいと思います。

哲学カフェ186回例会

時刻: 2023年12月14日（木）　07:00 PM～

テーマ　「激動の一年をふりかえって」

＊異常気象の乱発による生存の危機に加え、ウクライナに続き、中東での新たな戦争危機。

＊この二重三重の危機に国際社会はこれを乗り切れるのかどうか。私たちの基本的な視点を探る。

以下のURLかミーティングID、パスコードで入室できます。
パソコン、スマホ、タブレットのいずれかでどうぞ。

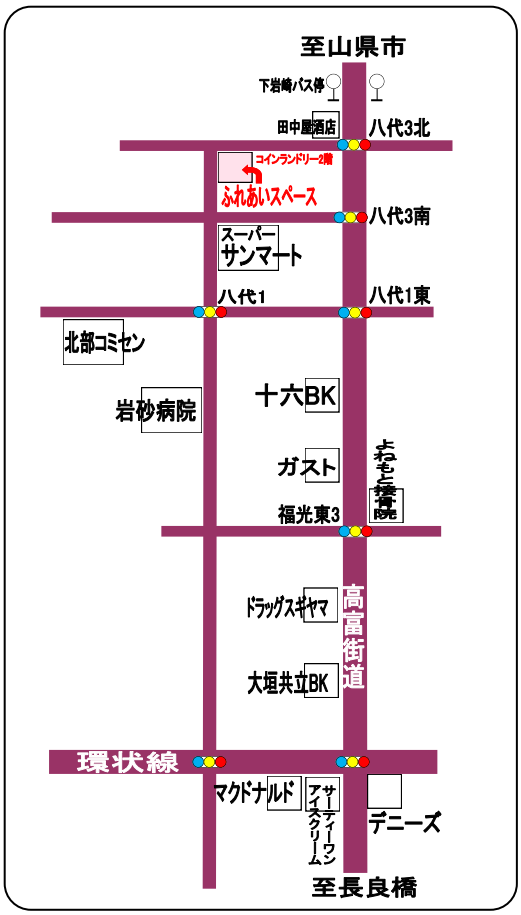
参加 Zoom ミーティング
https://us02web.zoom.us/j/87285199513?pwd=d2xqb0trUzhrS3FKdGdwcTBjbzg0QT09

ミーティング ID: 872 8519 9513
パスコード: 179084

右のQRコードからも参加できます。
お手持ちのスマホでQRコードを読み取るとそのまま入場できます

例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です



哲学カフェ　第29期(2023年後半)例会予定　＊毎月第2木曜日、午後7:00～9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第183回 9月14日(木)	「世界125位、なぜ男女平等は進まないのか？」 ＊今年のWEFの発表では日本はまたも下がって、146カ国中の125位。東アジアでは最下位。 ＊特に政治と経済の分野での遅れがひどい。何が問題で、どうすれば良くなるのか考えてみたい。
第184回 10月12日(木)	「ファクトとフェイク、あなたはどう見分けますか？」 ＊発信される情報が偽ものであったのは、古今東西おびただしい。今は情報が大量でかつ巧妙である。 ＊ウクライナ戦況、原発事故汚染水、コロナワクチン等。真偽をどう判別するのか？
第185回 11月9日(木)	「あらためて私たちの家族観を問い直してみよう。」 ＊家族は大切、だがその「家族」像は古いままで、制度上も「世帯」「家族」本位である。 ＊いまこそ多様な家族形態を見つめ、「個人の尊重」を軸にした、新たな家族観を創りださねば・・。
第186回 12月14日	「激動の一年をふりかえって」 ＊異常気象の乱発による生存の危機に加え、ウクライナに続き、中東での新たな戦争危機。 ＊この二重三重の危機に国際社会はこれを乗り切れるのかどうか。私たちの基本的な視点を探る。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。
口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de　ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや

アラカルト

★以前、NHKの教養番組、「100分で名著」の中で「ショック・ドクトリン」(ナオミ・クライン著)の紹介があった。堤未果の絶妙な解説から、フリードマン率いるシカゴ大学経済学派のおぞましい「新自由主義」に恐怖を覚えた。現アメリカ社会の根本問題が暴露されていたように思う。

★「哲学通信」では「堤未果著のショック・ドクトリン」が紹介されており、その書評に啓発されて、読ませていただいた。また、同じ著者による「貧困大国アメリカ」(岩波新書)をも読むきっかけとなり、あらゆる悲惨な天災や人災「ショック」を巧妙に利用する国家権力の魂胆と策謀を垣間見ることができた。

★貧困の問題と関連し、戦争と平和の問題についても考えさせられた。「弱肉強食」「勝ち組・負け組」の差別化、社会的弱者を食い物にする「新自由主義」は今まさに日本国内でも進行しており、ひとたび貧困層に陥ったら最後、脱出の方法はむつかしいと感じた。

★70年ほど前、私は高校生であったが、貧困を恐れかつ憎んでいたことを思い出した。「ロボット」という字の面白い英語教師がいて、愉快な話をしてくれるのであったが、ある日、私たち学生に向かって、「貧乏な家に生まれたら、一生貧乏であることを覚悟したほうがよい。そこから這い上がるには、3つの条件が要る。抜群の頭脳、抜群の体力、抜群の精神力をもって、競争社会に勝ち抜くことである。」と。

★これを聞いて私は愕然としたことを覚えている。3つの条件のうち自信があったのは、体力ぐらいであったからである。

★あれから70年、貧困から何とか抜け出すことができたのは、善良な人々の支えと良き仲間に恵まれたおかげであり、時代背景としても全く運がよかった、という風に感じている。

(島田幹夫)